

魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名: 佐野 将大 所属: 香川県立高松支援学校 記録日: 2024年2月1日
キーワード: 重度重複障害 観察 インクルーシブ 活動や環境の設計

【対象児の情報】

・学年 高等部2年生

・障害名 不明(医療機関が精査したが不明)

・障害と困難の内容

【障害の内容】

- ・重度重複障害がある。
- ・座位が取れない。寝返りができない。
- ・快／不快を示す発声があるが発語は無い。

【困難の内容】

- ・外界の変化を受け止めている様子の解釈は、支援者に依存している。
- ・コミュニケーションや活動の組み立ては、支援者の解釈に大きな影響を受ける。
- ・「彼のもつ身体の動き」について観察を通じた検討ができる人は少ない。
- ・観察を通して検討した結果を、支援者間で共有する方法が明確ではない。

【活動目的】

・当初のねらい

- (1) 彼のもつ身体の動きについて観察を基に整理をする。
- (2) その結果をもとにコミュニケーションや活動を組み立てる。
- (3) 観察の視点を「彼がインクルーシブな環境で生活をするなら」とする。

・実施期間

令和5年4月～令和6年2月

・実施者

佐野将大、生徒の保護者

・実施者と対象児の関係

副担任

【活動内容と対象児の変化】

○ 対象児の事前の状況

事前の状況を把握するための観察と調査

- (1) 目的 彼の状況を大まかに把握する。
(2) 方法 観点を準備し、観察したり情報を収集したりする。
(3) 時期 令和5年4～5月
(4) 結果

表1 彼の状況を大まかに把握した結果

- 《体格》 ・身長や体重は大きくない。小柄な体格をしている。
- 《姿勢》 ・布団とクッションを使って横になって過ごすことが多い(写真1)。
・生活での移動時にはバギー、学校では座位保持いすで過ごす(写真2)。
- 《声》 ・発語は無いが、「んー」という発声がある。
・快の発声、不快の発声がある。
・状況から読み取ってもらう必要があるため解釈は支援者間で分かれがち。
- 《食事》 ・ペースト食という形態のものを食べる(写真3)。
・嫌いなものに対する表出ははっきりしている。
・一口目には不快の表出は出ない。●以下考察で活用
・続けて二口食べると不快を示すことができる。●以下考察で活用
・食事の終わりを嫌う。
・食事の後半になると、ちょっとしたことで終わりを疑う。
・「牛乳を飲むこと」や「特定の先生の動き」、「片付けの気配」が終わりを示す動きだと認識し泣くことがある。◆以下考察で活用
- 《手》 ・「手を口に持っていく」「両手を合わせる」ということはできない(写真4)。
・片腕をまげてもう片方の腕を伸ばす原始反射の残存のような動きがある。
・目的的な手の動きは見られない。
・手を揺らしたり、身体内外の感覚を求めたりする動きも見られない。
- 《身体》 ・寝返ることは無い。呼吸は比較的しっかりしている。
・力が強く入ってしまうタイプではない。時々ぴくんと緊張が入る。
・布団である程度力を抜いて過ごすことができる。
・頻繁には起こらないが、全身伸展の緊張が入ることがある。
・車いすに座っていると、重力の関係から姿勢が崩れてくる。
- 《目》 ・彼の近くに行くと、目が合うことがある(写真5)。
・追視はとてもゆっくりではあるが、できる。■以下考察で活用

- (5) 考察 食事に対して不快を示すことができるが、一口目や食べる前(口元にそれが来たとき)には不快の表出ができない●ことから、よく分かるものであっても、刺激ごとに分けて丁寧に時間をかけてかわり、反応を待つ必要があるのだろう。
追視がとてもゆっくりである■こと、給食の終わりを片付けの気配で感じ取れていそうなこと◆、などから、外界の変化を捉えるには聴覚情報が有意で、近くにあるものを視覚で補助的に捉える、という捉え方をしているのではないだろうか。



写真1 横になって過ごす



写真2 使用している車いす



写真3 ペースト食



写真4 手や身体の様子



写真5 目が合うことがある

○ 活動の具体的内容

Ⅰ 「彼がインクルーシブな環境で生活をするなら」という問いからくる観察の視点の抽出

- (1) 目的 観察の目的を定める。
- (2) 方法 日常の彼と支援者の様子を観察し、新たな観察の視点を収集する。
- (3) 時期 令和5年6～7月
- (4) 結果

表2 日常の観察から抽出した新たな観察の視点①～⑤

- ① 「目を見開く」ことがあるのだけれど、それはどういう意味なの？(写真6)
- ② 時々足が上がることもあるのだけれど、それはどういう意味なの？(写真7)
- ③ 彼と挨拶するにはどうしたらいいの？
- ④ 彼と遊ぶとき、何を大切にしたらいいの？
- ⑤ 彼が過ごす環境を作るとき、どんな要素を入れたらいいの？



写真6 目を見開く



写真7 足が上がる

2 観察の視点①に対する実践 ～「目を見開くことがある」編～

(1) 目的 彼は、時々目をグッと見開いて、目の動きがピタッと止まることもある。眼振も出ておらず、瞬きもしない。普段は支援者の手のひらを目の近くにもっていきと瞬目反応(目を閉じる)が見られるのだが、このときは瞬目反応もない。支援者は「てんかんとの見分け方は?」「意識が飛んでいるの?」等心配している。

この反応は、インクルーシブな場面を考えたとき、周りの支援者や友達から「目を見開いているとき(写真6)ってどういう意味なの?」という質問として現れるだろう。彼と一緒に過ごしていて支援者が初めに感じる不安なことだろうと考えられるため、観察を通して解釈を検討しておく意義は大きいと考える。

- (2) 方法 iPhone で写真記録を取り、整理して考える。その結果を保護者にも見てもらう。
- (3) 時期 令和5年9～11月
- (4) 結果

表3 記録した写真を一部抜粋し整理したもの

目を見開いた場面の写真記録	比較場面の写真記録
 <p>体育館のステージに上がったとき</p>	 <p>普段の目</p>
 <p>校外学習でバスに乗ったすぐあと</p>	 <p>バスの中でもしばらくしたら戻る</p>
 <p>静かな教室の隣の部屋から声</p>	 <p>暗いときも目は大きいが目は動く</p>

表4 写真の記録から文字に起こして整理したもの

目を見開いた場面	よく似ているが目を見開いていない場面
・体育館のステージに上がったとき	・しばらくすると元に戻る
・校外学習でバスに乗ったとき	・ //
・修学旅行でアトラクションの入り口に入ったとき	・ //
・静かな教室の隣の部屋から先生の声が聞こえたとき	・ //
・廊下で〇〇先生から声をかけられたとき	・ //
・BGM がしっかりと鳴っている体育館に入ったとき	・ //
・静かな教室で遠くの音楽室から音が聞こえてきたとき	・ //
	・暗いときにも目は大きくなるが、目は動いている

・保護者の感想

「全力サーチモード(聴覚を用いた)」だと思います!

- (5) 考察 新しい環境、普段と違う環境、時々入る場所で目を見開いていて、しばらくすると基に戻る(目が動くようになる)ということが繰り返し観察された。聴覚での定位反応に伴う運動表出の一つなのではないかと考えている。
つまり、耳を澄ませて周りの様子を確認している時である可能性があるため、目を見開いているときには支援者は一緒に周りの様子を観察し、どのような状況に対して意識が向いているのかを想像する、ということがかかわりの出発点になるのではないだろうか。また、普段から聴覚で今どこにいるのかを理解しようとしている可能性があることから、音をしっかりと聞かせながらゆっくりとしたペースで移動をする、その場その場の音を聞かせる、ということも大切なことだと考えている。

3 観察の視点②に対する実践 ～「時々足が上がることもある」編～

- (1) 目的 彼が車いすに座っているとき、膝から下の足をピコんと伸ばす動きをすることがある。それは支援者から言葉かけがあるときに、少し「しかめっつら」をしながら出ることもあるため、支援者は「はい」と言われているような気持ちになったり、答えてくれているような気持ちになったりする。
多くの支援者の印象に残りやすい動きであり、彼はこれまでこの動きで「スイッチ」を操作したらいいのでは?とか「やる気の表れではないの?」というような評価をされることもあった。しかしその反面、原始反射の残存から来るものや辛いときに表出しているものである可能性もある。支援者の印象に残り、かつ「やる気の表れ」「つらい時かもしれない」という真逆の解釈可能性を含む動きであることから、観察を通して解釈を検討しておく意義は大きいと考える。
- (2) 方法 iPhone のメモ機能で記録を取り、整理して考える。身体の動きについては理学療法士の助言ももらう。
- (3) 時期 令和5年9～11月
- (4) 結果

表5 彼が足を上げていたときの記録

・修学旅行中に、地下駐車場に止めたバスからホテルに入るまでの地下通路を通っているとき
・車いすに座っていて、首のひねりの動きが強くなってしまっているとき
・車いすから降りてニコニコしていたところ、すぐにバギーに乗り換え、帰り支度が始まったとき

- (5) 考察 首の角度、座り方、が影響して足の動きが出ている可能性と、普段と違って何かしら不安を感じたときである可能性があるのでないだろうか。記録で全ての状況を捉えられていない可能性もあるが、足が動いているときには姿勢を直し、何か不安なことが他にもあるかもしれない、と考えることがやりとりの出発点であると考えている。

4 観察の視点③に対する実践 ～「彼と挨拶をするにはどうしたらいいの」編～

(1) 目的 学校で過ごしていると、廊下ですれ違う先生はたくさんいる。廊下で挨拶をしてくれる教員の様子を観察していると、それぞれの方法で決まったパターンで挨拶をしている教員もいる。彼が外界に注意を向けている状態のときであれば笑顔になることも多い。彼との付き合いの長さがあればこのようなやりとりは可能だが、これから新しく彼と接する支援者や友達に向けて、何かしら挨拶の方法を提案できれば、その意義は大きいと考える。

(2) 方法 挨拶のやりとりに必要な要素(刺激・距離・スピード)を抽出し、挨拶の行動を組み立てる。

(3) 時期 令和5年9～11月

(4) 結果

発見と確認(視点③) 近い距離で目を合わせてから少し顔を右にずらすと、ゆっくりと目を追いかけてくれる(令和5年11月16日撮影)



始めの様子

近い距離で声をかける

目が合う

顔を少しずらすと追いかける

発見と確認(視点③) 左手を触ったりトントンとしたりしたら、ニヤツとしてくれる(令和5年11月16日撮影)



始めの様子

左手にそっと触れる

左手を包み込んでトントン

にやり

組み立て(視点③) 発見と確認の結果を組み込んだ挨拶のシナリオ

- ・おはようと声をかけながら目が合うまで待つ
- ・少し自分の顔をずらし、目がもう一度合うのを待つ
- ・目があったら、声をかけて左手をトントンとする
- ・表情の変化や首の動きを観察し、声をかける

組み立て(視点③) 観察結果から組み立てた挨拶の様子(令和5年11月20日撮影)



声をかけて目が合うまで待つ

目が合った!

顔を右にずらす

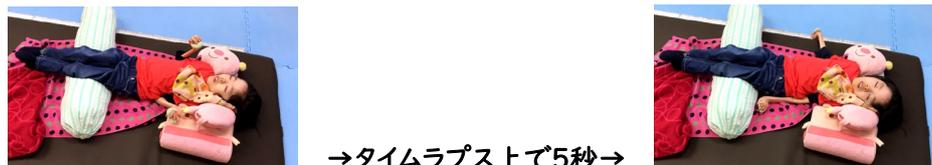
左手トントンしてにやり

(5) 考察 安定して「にやり」が出てくるかわり方を整理することができた。「にやり」が出ないときもあるが、そのときは眠い、呼吸の様子が普段と異なる等、彼の意識が外界に向けにくい状況にあるときのように感じている。

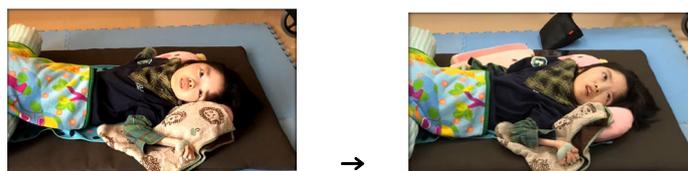
5 観察の視点④に対する実践 ～「④ 彼と遊ぶとき、何を大切にしたらいいの？」編～

- (1) 目的 ここまでは、気になる身体の動きがあることに対する観察実践と、簡単な挨拶を組み立てる実践であったが、彼としっかりとかわりを作っていくためにはこの質問は避けて通れないだろう。彼と遊ぶためのポイントを探っていくことで、手ごたえを感じるコミュニケーション場面を少しでも増やしてもらいたいという思いから実践した。
- (2) 方法 彼の普段の動きを「目視観察」「動画撮影」「タイムラプス撮影」を用いて収集し、整理する。
- (3) 時期 令和5年5～11月
- (4) 結果

発見と確認(視点④) 左に身体を捻るような不随意様の緊張が入ることの発見(タイムラプスによる撮影)



発見と確認(視点④) 上方向にいる教員の動きを確認する随意的な動きの発見(タイムラプスによる撮影)



発見と確認(視点④) 頭皮マッサージ中目を閉じることがある(30秒ごとのインターバル撮影)



組み立て(視点④) 発見と確認の結果を組み込んだ遊びの様子



- (5) 考察 左側に向いていく動きは不随意的なものであるが、左に捻り切らなければ、本人にとって「ホームポジション(本校の理学療法士の勤務経験のある教諭の話)」である可能性があり、動画視聴には向いているかもしれない。上に向く随意的な動きを活用した遊びのレイアウトや内容を考えられたことが大切なことだと思っている。

6 観察の視点⑤に対する実践 ～「⑤彼が過ごす環境を作るとき、どんな要素を入れたらいいの？」編～

- (1) 目的 聴覚が有意で、音から場所や人の移動を把握している可能性があること、上方向を向くのは随意で、左に向くのが楽な姿勢である可能性があること、が分かってきた。分かってきたことをヒントに、彼にとって環境の変化を把握しやすい学習場面を作ることとする。
- (2) 方法 観察結果から、彼が過ごす環境に提案を加えていく。
- (3) 時期 令和5年5～11月
- (4) 結果 以下の写真6、7のように、彼が過ごす環境を調整していった。



写真6 学校で普段過ごす場所の設計



写真7 彼の普段の場所を示したための鈴（ドアベル）

- (5) 考察 彼の周りを支援者が意図して動けるように余白を作ったことで、どれぐらいのスピードで近づけば彼が目でも人の姿を追えるか、どのぐらいの距離で追えるか、ということが分かりやすくなった。ロッカーから教材を音を出しながら準備したり片付けたりできることも便利だった。ドアベルで音を鳴らし、自分の場所に付いたことを伝えたり、移動が始まることを伝えたりしたいと思っているが、その効果は不明である。ただ、伝える環境があること自体はとても重要だと思われるので、今後も続けていきたい。

○ 対象児とのコミュニケーションや環境の事後の変化

この実践を通して変化した・発見したと思われることを以下にまとめる。

【実践者の変化】

実践初期の変化

- ・ 食事をするときには一口目にはノーが言えないということが分かった。
- ・ 音を聞かせて近づくことが重要であると感じられるようになった。
- ・ 食事の終わりに誤解のないように、片付けの音を中心に聞かせるようになった。
- ・ 目が合う距離、相手の目を追うスピードがつかめるようになった。
- ・ 彼と関わるときのスピードがゆっくりになった。
- ・ 目が合いにくいときと、合いやすいときがあることを感じ取れるようになった。
- ・ 目が大きく見開いているときは、新しい刺激を入れるのを少なくし、しばらく観察するようになった。

かかわりが変化したこと判断できるようになってきたこと

- ・ 身体の状態に意識が向きやすい状況が時々あり、そのときにはやりとりは成立しにくいことが感じられるようになった。
- ・ やりとりが成立しにくいときには、身体のケアを優先してかかわる、という判断ができるようになった。
- ・ 慣れない手順で新しい場所に移動すると、周りの様子に注意をむけているということが感じられるようになってきた。
- ・ 繰り返す遊びの中で「ワクワクが高まってくる表情」が読み取れるようになってきた。
- ・ 顔を合わせて、声を聞かせる、ということが大切だと感じられるようになった。

かかわりが変化したこと発見できたこと

- ・ 左手を触れてトントンするとニヤリとすることを発見した。
- ・ 左側に捻るような不随意様の動きを発見した。
- ・ 上側に向くような探索的な動きを発見した。
- ・ 右側への首の動きは見られない、ということが分かった。
- ・ 顔の上側の方向に座って遊ぶことで、顔の動きを引き出すことができることが分かった。
- ・ 頭皮マッサージをすると、目を閉じたり、口の動きが減少したりすることがあると分かった。
- ・ 同じような繰り返しの遊びでも、3回、4回としていくと笑顔になり声を出して笑うということが分かった。
- ・ 目を合わせて小さな刺激が入ることも、身体に振動や揺れの大きな刺激が入ることも楽しめることが分かった。

他の人とのかかわりと自分のかかわりを比較して発見できたこと

- ・ 人によって、これまでのかかわりからニヤリとする場面やかかわりがあることが分かった。
- ・ 久しぶりの人と会って声を聞くと、とてもうれしそうにすることが分かった。

かかわりが変化することで環境が変化したこと

- ・ 左側にテレビがある環境ができた。
- ・ 自分のエリアにドアベルが設置された。
- ・ 遊びで使う「マッサージ、電動のクシ、乳液、うちわ」を置くための場所を本人が過ごすエリアの近くに設置した。

【報告者の気づきとエビデンス】

1 主観的気づき

楽しいことや好きな刺激が提供されても、一回目の刺激の提供で笑うことは稀であり徐々に楽しいことが分かり笑顔になる場面があるような気がする。彼にとってきっと楽しいだろうと思われる刺激を、丁寧に計画的に繰り返し提供することが大切なことではないか。

2 エビデンス(具体的数値など)

《遊びの手順》

- ① うちわをロッカーから音を出しながら取り出す。
- ② 彼の頭の上から「パタパタパタ」と音を出しながら近づける
- ③ ちょっと待って、顔に向かってうちわで風を送る
- ④ 止めて、「パタパタパタ」と音を出しながら遠ざける
- ⑤ ②に戻る

《遊びの様子の記録 手順③のときの表情を抽出》

手順を繰り返しているときの彼の表情	その時の様子
	1回目 笑わない
	2回目 まだ笑わない
	3回目 ちょっと笑う
	4回目 顔を上げて笑う
	5回目 顔を上げて笑う
	…その後8回目まで笑いました

3 その他エピソード(画像などを含めて)

(1) 分かったことを組み合わせて学校祭の役割をつくる

本実践で分かったことを応用し、学校祭のときに使ってみることにした。出し物の時の、受け付け係である。目の前に VOCA という音声を録音し再生できる機器があるが、本人は押すことができませんので、実践者が彼と目を合わせてから押すようにした。

(VOCAから流れる音声)

「この会場には人数制限があります。」

「受付をしますから、僕と目を合わせてから、左手をタッチし入場してください。」

そうすると、「笑顔になってくれたー」と喜んでくれる人が複数いた。彼も、しっかり仕事ができたのではないかなと考えている。私が考える彼の仕事は、「外に注意を向け、やってくるお客さんの顔を見て、お客さんからのかわりに対して表現をする」である。

この会場には
人数制限があります。

受付をしますから
僕と目を合わせてから
左手をタッチして
入場してください。



写真8 学校祭のときの彼の役割

(2) 保護者にインタビューした結果(大意を変えず編集)

「なんとなくこうかもしれない」としていたところを、第三者の立場から「こうかもしれない」と整理し、理解しようとしてくれていることがとてもありがたく思います。

観察の視点① 目が見開く編について

目が見開く場面については、これまでは深く考えないようにしていました。今では、こういうことかな?と立ち止まって、周りを見て考えるようになりました。よく似た場面で「けいれんかな?発作かな?」と思う姿もあるような気がします。眼振があるなど、また違う姿かもしれません。その姿とも見分けられるようになっていくような気がします。発作の可能性も頭に入れつつも、外の様子をしっかりと感じているのかもかもしれない、と思ってかかると、本人の気持ちと合致する場面が増えるかもしれません。そうしたら、本人は嬉しいだろうなと思います。

観察の視点② 足がピンと伸びる編について

足がピンと伸びる場面については、嫌なとき、不安なとき、もありますが、楽しすぎる時、もあるような気もします。いずれにしても、「力がはいつてしまうとき」であると思っています。ただ、大人の言葉かけに対応して足が上がることもあるので「力が入っているんやね」と理解できたらいいな、と思っています。

観察の視点③ 挨拶の組み立て編について

本人は顔や声のトーンを覚えていくと感じています。提案いただいたようにゆっくりと顔を見て関り、ゆっくりと挨拶ができれば、いろんなことがつながっていくと思います。また、目をじーっと合わせて好意的な声かけや笑顔があると、本人もつられてニコツとすることがあるような気がしています。表情、声のトーン、それを伝えるペース、などが組み合わせると、本人とやりとりしていくスタート地点になればいいなと思います。

観察の視点④ 遊びの組み立て編について

遊びの組み立て、も、ゆっくりと、繰り返し、が大切なのですね。激しい動き、ぐるぐる回して止まって・・・というようなことも好きです。何度かして、止まって、「するよー?」と聞くと数を重ねるごとにうずうずしているような姿が見られます。これも、ゆっくり何度か繰り返す、が大切なのですね。

・全体を通して

実践の進み方が「視覚や聴覚の力を把握し・・・」という順番ではなく、本人と他者がかかわっていくときにどのようなことが疑問に思われるだろうか、ということから組み立てられていることは、とても自然で実際に使える情報になっているような気がします。彼と関わる時のヒントとなるスタート地点のような資料を作ってくれた印象です。

昔から、障害の原因が分からない、とされてきました。私は原因が知りたいタイプで、いろいろな検査もしてもらいました。神経の状態が正常であると分かって、〇〇の状態が〇〇であると分かって、どのようにかかわったらいいのか、とかどのような勉強をしていったらいいのか、ということについての研鑽は、自分一人でやらないといけないと思っていました。学校で生活を送るうちに、いろいろな人と出会い、学校や外の環境で楽しそうにしている姿を見るようになって、少しずつ自分一人では難しいな、と思えるようになってきました。人の手は借りないかん。ですけど、どのように人に説明していくか、ということでは提案をいただき嬉しかったです。

・今後に向けて

お互いが楽しく生活する方法、ということを考えていきたいです。彼は、家から外に出るそぶりを見せた後、忘れ物があったら一度布団に戻すとしっかりと怒ります。ということは、何らかをヒントに外に出るということを理解しているということでしょうか。どのようなかわりをしていくと彼がもっと楽しくなるのか、考えていきたいです。

音楽の同じ部分で笑ったり、家に来る特定のお客さんの声を聞いて笑ったりします。記憶に残って楽しめる部分があるのですね。ということは、彼に届く情報があって、それがどのようなものなのか、もう少しつかめるようになりたいです。どのようなことを楽しめて、どのようなことを分かっていけるのか。彼のような子どもとどのように関わっていったらいいのか、という情報はとても入手するのが難しいと感じます。このような子どもたちのための研鑽を今後もよろしくお願いします。